

世代間伝達に関する精神分析的考察

辻 河 昌 登

問題と目的

人生には出生、入学、卒業、就職、結婚、子どもの出生、親の死など、さまざまな節目がある。その中でもとりわけ子どもの出生は、親にとっては人生における自らのありようを考える上で大きな転回点となる。親は子どもを持つことで自分たちの両親と同一視するようになり、自分たちの両親と自分たちとが同じ子どもを持つ者として対等であるかのように感じられることがある。それと同時に、幼児期に自分自身の親との間で持っていた関係のイメージが賦活され、幼児的欲求が再現され、子どもと自分たちとも同一視するようになる。親は日々育児をしながらこの二つの同一視の間を揺れ動き、そのプロセスの中で自らの育ちを遡及的に回顧し、原家族や配偶者や子どもとの関係を内的に再構築し続けているものと思われる。

筆者が心理臨床の場で出会う育児不安ないしは育児困難を訴える母親たちも、上記と同様のプロセスを体験していると思われるが、そのような母親たちと出会う時、彼女たちが子育ての仕方がわからないといった技術的なレベルの問題よりも、むしろ自分の力では統制し得ないような漠然とした不安に絡め取られて苦悩していると感じることが多々ある。彼女たちの話に耳を傾けていると、そうした不安には母親自身ないしは家族の未解決の問題が潜んでおり、その問題が世代間伝達されることによって子どもがその問題を背負わされ、症状や行動として表現していることに気づかされる。

このように、心理臨床の現場で出会う親とのかかわりの中で、親自身が自分の親との間で未解決の問題を抱えている事例を体験するうちに、それらの事例を世代間伝達という観点から理解していくことの重要性を痛感するようになった。親子関係における無意識的葛藤の問題を学問的起源とする精神分析学は、こうした世代間伝達について検討する際に大変有益な示唆を与えてくれるものと思われる。そこで本論では、世代間伝達に関する先行研究の中から、国内外で頻繁に引用されており、学問的に価値が高いと考えられている精神分析的な学術論文を抽出して展望し、今後の世代間伝達研究の課題を明確にすることを目的とする。なお本論では、世代間伝達 (intergenerational transmission) という言葉を、「親が自分の親との関係の中で未解決となっている問題に絡め取られ、次の世代を育むことに困難をきたすという形でその問題が伝達されること」と定義して用いることとする。

エディプス・コンプレックスと世代間伝達

精神分析的な観点から世代間伝達を考察するにあたり、小此木（1992,2002）を下敷きにしなが、精神分析学の創始者であるフロイト,S.のエディプス・コンプレックス論をまず取り上げてみたい。彼のエディプス・コンプレックス論は、ギリシャ三大悲劇作家の一人であるソポクレスによるエディプス王の物語に基づくものであり、子どもが異性の親に愛着を向け、同性の親に取って代わりたいといった競争心や敵意を抱くとするものである。これはフロイト自身が、1897年の自己分析の中で両親に対する無意識的な感情を洞察し、それをその後、人類における普遍的なものとして提唱したものである。フロイトが取り上げているエディプス物語を「オイディプス王」（1967）に基づいて要約すると、以下の通りである（なお本論では、「エディプス」と「オイディプス」といった二つの表記について、我が国の精神分析の世界で用いられることの多い「エディプス」に統一して表記する）。

ギリシャのテバイの王であるライオスと王妃イオカステは、子どもが生まれるやいなや、その子どもの足を留め金で刺し、キタイロンの山麓に棄てて、この世から葬り去るように家僕の羊飼いに命じた。ところがその子どもは、棄てられることを不憫に思った羊飼いに助けられ、子どものいないコリントスの王ポリュポスに渡され、養子として育てられた。子どもの名前は助けられたときの特徴である「腫れた足」から、エディプスと名付けられる（「エディプス」はギリシャ語で「腫れた足」の意）。息子を棄てて十数年後、父ライオスは4人の供を連れて出た旅の途上で、ある男と口論の末、殺害される。コリントスから出て放浪の旅に出ていたエディプスは、当時テバイを脅かしていた怪物であるスフィンクスの謎かけをその秀でた知性によって解き、テバイの国を救った。このことで、エディプスはライオス亡き後のテバイの王位につき、王妃であるイオカステを妻とし、4人の子どもを授かる。やがて、エディプスはライオスを自分の父とは知らずに殺害してしまったこと、そして母イオカステを母と知らずして妻にしたことを知らされ、その罪悪感のために自ら目をえぐって盲目の罪人となる。

しかし、上記のことは実はエディプス物語の後半部分であり、フロイトはその前半部分を割愛してエディプス・コンプレックス論を展開したのである。その割愛された前半部分を要約すると、以下の通りである。

エディプスの父ライオスは、青春時代に故郷を捨てて、ペロポネソス半島の王宮に旅人として迎えられたが、彼はその恩人から受けた恩をあだで返してしまった。つまり、ペロポネソスの美しい息子クリュシュポスをだまして祭りに連れて行き、この美少年クリュシュポスを性的に誘惑してしまったのである。しかも、この過ちを悔いて、クリュシュポスは自殺してしまう。テバイの王ライオスは、その後イオカステと結婚したが、アポロンの神託によって、一人息子が生まれるであろうが、かつてライオスがクリュシュポスに対して犯した罪の呪いのために、その息子はほかならぬライオス自身を殺すことになるだろうと告げられた。ライオスはこの神託を信じ、長い間、妻と別居生活を送った。しかし、妻のイオカステはこの呪いがあるにもかかわらず、自分

が子どもを欲しいために夫を酔わせて性的関係を持ち、子どもを身ごもってしまう。しかし、そのイオカステもまた、生まれてくる赤ん坊が父ライオスを殺すであろうという呪いをかけられていることを知って恐ろしくなる。

フロイトはこうした物語の前半部分を知っていたにもかかわらず、何故にその部分を割愛したのだろうか。このことについては、フロイト研究者であるバルマリ（1979）やクリュル（1979）らの詳細な調査に基づいた知見がある。

従来、ジグムント・フロイトの母アマリエ・フロイトは20歳のときに、先妻サリーの亡き後、二番目の妻としてジグムントの父ヤコブ・フロイトのもとに嫁いだとされていた。しかし、バルマリやクリュルの調査によって、父ヤコブは3回結婚しており、しかも女性関係について様々な問題があったという事実が明らかになった。そしてその中で、最初の妻サリーとアマリエの間にもう一人の妻レベッカの存在が浮かび上がってきた。このレベッカは行方不明になった、あるいは自殺したとされており、それは父ヤコブが若い娘であるアマリエとの浮気によって身ごもらせたことが原因である可能性もあるという。もしレベッカがいなくならなかったならば、アマリエは未婚の母となり、ジグムントが私生児になっていた、あるいは父ヤコブによってアマリエは墮胎させられていたかもしれないのである。こうした可能性があったにもかかわらず、ジグムントは父の女性関係や自己の出生の由来を自己分析の中で取り扱わず、否認していたのである。ところが、バルマリによると、ジグムントの敬愛したミケランジェロのモーゼ像に、二人の妻をはべらせたモーゼ像に加えて、父のもう一人の妻レベッカの存在が発見できるという。モーゼ像の左右には、レアとラケルという二人の女性像がはべっている。この二人の女性はどちらも聖書の中（創世記29）の人物で、彼女らは姉妹であり、同じ男と相次いで結婚している。その男が族長ヤコブである。ジグムントの父ヤコブと同じ名前である。バルマリは、息子のジグムントがモーゼ像に魅せられるのは、父の女性関係に対する無意識の探求心が働いていたからではないか、そしてモーゼ像は、ジグムントが抑圧しなければならなかったことを暗示していたからではないかと分析している。その「抑圧しなければならなかったこと」とは、父の第二の妻レベッカの存在であり、ジグムントはモーゼ像の背後に無意識的にレベッカを見出そうとしていたというのである。モーゼからレベッカを連想するのは、聖書における族長ヤコブの母の名前がレベッカであることを考えると、至極当然のことであろう。つまりジグムントは、モーゼ→族長ヤコブ→父ヤコブといった連想の中で、抑圧しなければならなかった父の隠された妻レベッカの存在を思い描いていた可能性がある。またバルマリは、聖書における族長ヤコブの第二の妻ラケルの長男ヨセフは、夢の解釈者として知られた人物であり、当時夢解釈に専心していたジグムントがヨセフを自分自身と同一視するのは、当然の成り行きであることを指摘している。

ジグムントはやがてこの父性像の象徴としてのモーゼ像に同一化し、家庭内でも弟子たちとの間でも家父長的態度を取るようになり、そしてモーゼ像と同じように、二人の姉妹をはべらせるようになる。つまり、妻マルタとの生活の中で、マルタの妹ミンナも同居させるようになったのである。そして、ミンナとジグムントは二人で旅行をしたり、お互いの寝室を自由に行き来したりしていたことが、フロイト家の家政婦パウラの証言からも明らかになっている（ベルテルセン、1987）。ちなみに、ジグムントがユングと決別したのは、ユングにミンナとの間柄を問いつめら

れたことによるとも言われている。こうしたジグムントと「二人の妻」(マルタとミンナ)との関係から連想されるのは、父ヤコブの女性関係である。しかし上述した通り、ジグムントは父ヤコブの女性関係を自己分析の中で取り扱うことはしなかった。そのため彼の中では未解決の問題となり、それが父ヤコブとの無意識的な同一化を生み、「二人の妻」をはべらせることになったのである。つまり、息子のジグムントが父ヤコブの女性問題を追及することなく否認することで、やがて自分も無意識のうちに同様の行動をとるといった世代間伝達が生じたのである。

エリクソン,E,H.(1980)は、フロイトとユングの往復書簡の分析によって、フロイトの家父長的人間関係から「ライオス・コンプレックス」のテーマが浮かび上がるとしている。エリクソン,E,H.によると、フロイトがユングと書信交換をするようになったのが50歳の時であり、彼が自分の仕事が完成しうのかどうかに不安を感じており、とりわけ、その仕事が存続してゆかれるのか、「後継者」はどうなるのかを心配し続けていた時期であり、その中でエディプス的ではない、つまり自分を裏切ることのない本当の後継者を、ほとんど幻想的に追いつめていたという。そしてエリクソン,E,H.は、自分の思想が裏切りによって滅びてしまうことに対して一貫して警戒し続けており、またその警戒からエディプス物語におけるアポロンの神託である「エディプスはその父を裏切ることになるであろう」というライオスの受け取ったメッセージが思い起こされるとし、このような後継者に裏切られる不安のことを「ライオス・コンプレックス」と名付けた。そして、フロイトのように父に対してエディプス・コンプレックスを抱いた息子が父になり、やがては息子(後継者)に対して父としてのエディプス・コンプレックスを向け、一方では裏切られることに対する不安や恐れが高まるほど、後継者にとする人物を支配しよう、コントロールしようとする願望が高まることを指摘し、フロイト自身に解決されていなかったのは、親になって子どもや弟子を育てる生殖性(generativity)の発達課題をめぐる葛藤であったとしている。フロイトがユング、アドラー、フェレンツィ、タウスクらの優秀な愛弟子たちに対して、自分を超えられるのではないかという不安を抱いて破門したり、喧嘩別れしたりしたことは周知の事実である。フロイトは、父親が自分に抱いたかもしれないライオス・コンプレックスの認識を回避したのと同様に、自分自身の内面におけるライオス・コンプレックスの認識をも回避したのではないか、というエリクソンの見解は、世代間伝達という観点からみても卓見であるといえるだろう。

ところで、エディプス物語における呪いを恐れて妻との性交渉を避けていた夫ライオスに対して、妻イヨカスタはライオスを酒に酔わせて性的関係を持ち、エディプスを身ごもった。しかし、呪いを聞いて恐ろしくなり、ライオスと共謀して赤ん坊のエディプスを殺そうとした。このようにエディプス物語の前半には、エディプスの出生の由来や父母が子どもを持つことをめぐる葛藤が描き出されている。フロイトがエディプス・コンプレックス論の提起にこの前半部分を割愛したのは、父の女性関係に基づく自分の出生の由来を否認し、危うく未婚の母になったかもしれない母アマリエが、自分を身ごもったときに父ヤコブと共謀して殺そう(墮胎しよう)と計画していたのかもしれないことを否認したことと、無関係ではないのであろう。

阿闍世コンプレックスと世代間伝達

エディプス物語の中の母イヨカスタが息子エディプスに対して感じたような、母が子どもを持

つことをめぐる葛藤については、阿闍世王物語の中にもみられる。阿闍世王物語を定方（1984）に基づいて要約すると、以下の通りである。

古代インド、マガタ国の王子アジャータシャトル（阿闍世）の母である韋提希は、容色が衰え、王妃の座に不安を感じ、子どもが欲しいと思った。そこで予言者に尋ねると、「森の仙人が死に、三年後に生まれ変わってあなたの胎内に宿る」と言われる。しかし、不安のあまり三年待つことができなかった韋提希は、その仙人を殺してしまう。仙人は殺されるときに、「お前の息子になって不幸災厄をもたらし、お前の夫を殺す」という言葉を残して死んだ。韋提希がその直後に身ごもったのが阿闍世であった。仙人の話を知っていた韋提希は、子どもが生まれてきたらどんな恐ろしい災いが起こるか分らないと感じ、胎内の子どもの出生が恐ろしくなってしまう。そのため、墮胎しようと考えたり、産むときにも高い塔の上から産み落として殺そうとしたりする。そして、母に対して生まれる前からの怨み（未生怨）を無意識的に抱いていた阿闍世は、青年期になって真相を知り、怨みに駆られて父を幽閉し、母を殺そうとする。

古澤平作（1954）は、この阿闍世王物語に基づき、「罪悪意識の二種」という論文で「阿闍世コンプレックス」の概念を提起した。その後、古澤の弟子の小此木啓吾がこの概念を発展させた。小此木（1988）は、阿闍世コンプレックスには、母親の子どもを持ちたい願望と子どもに対する殺意の葛藤、子どもの側の未生怨と母親殺しの衝動、罪悪感の変遷といった三大要素があるとしている。そして小此木（2002）は、現代の阿闍世コンプレックス研究は、母である韋提希の側の子どもを持つことに対するアンビヴァレンスと、子どもである阿闍世の側の母に対する未生怨（生まれる前から抱いていた怨み）と愛と憎しみのアンビヴァレンスの相互関係を理論の中心に置く動向を発展させているという。エディプス物語のイヨカステや阿闍世王物語の韋提希のように、身ごもった子どもを産むか産まないかといった葛藤が、無意識のうちにその子どもにどのように世代間伝達され、子どもの精神発達にどのように影響を及ぼすのかは、われわれの日常の心理臨床にとって大変重要な問題であると思われる。

母子相互作用と世代間伝達

被虐待児を家庭訪問して観察していたフライバーグ,S.（1975）は、乳児の泣き声を聞いた親は、自分自身の親から受けた悲惨な養育体験を無意識のうちに乳児に投影した結果、乳児のことを迫害者のように感じておびえてしまうことを論じている。そしてその時、親はまるで自分自身の親が幽霊として出現したように感じられるとし、このことを「育児部屋（Nursery）の幽霊」（Ghosts in the Nursery）と表現した。上記のような乳児の泣き声を聞いた親は、投影同一化によって目の前の乳児のことを、無意識の深層で自分を苦しめた親のように感じ、母親は自分を苦しめる乳児を虐待することになる。そして虐待された乳児には、母親の未解決の葛藤が世代間伝達され、乳児も大人になると同様のことを繰り返すことがある。このような親の投影同一化によって歪んだ対象関係が繰り返し作り出される危険から乳幼児を守るために、フライバーグ,S.は乳幼児と親と治療者といった三者同席での心理療法である親-乳幼児心理療法を実践した。これによって彼

女は、治療者が共感的に母親の苦しみを理解し、母親がしみじみと乳幼時期の葛藤を振り返ることができると「育児部屋の幽霊」は消え、母子の自然なふれあいが可能になると考えたのである。

フライバーグ,S.の親-乳幼児心理療法は、後述するレボヴィシ,Sとクラメール,B.G.の実践によって、さらに発展した。こうした発展には、母子をユニット、つまり別個の存在ではなく一対のものともなしたウィニコット,D.W. (1965, 1971) の貢献が、その基礎として存在している。ウィニコット,D.W.は、抱っこ (holding)、あやすこと (handling)、対象を差し出すこと (object-presenting) といったやり方で子どもに発達促進的な環境を提供する「環境としての母親 (environmental-mother)」の機能を重視し、母親が「ほどよい母親 (good-enough mother)」として赤ん坊にかかわることの大切さを強調した。また、「赤ん坊は自分を見つめている母親の目を見るだけでなく、その目に映っている自分自身をも見ているのである」「赤ちゃんというものはいない。いるのは、赤ちゃんとお母さんという対になった一組である」「乳児期に個人の病理というものはない。あるのは赤ん坊と母親 (あるいは他の養育者) の関係の病理である」とし、母子のユニットにおける相互作用に注目したのである。

ウィニコットD.W.やフライバーグ,S.から強い影響を受けたレボヴィシ,S. (1988) は、母親は自分の赤ん坊に対して、「幻想の赤ん坊 (fantasmatic baby)」、「想像の赤ん坊 (imaginary baby)」、「現実の赤ん坊 (actual baby)」といった3つの異なった赤ん坊を持っているとしている。「幻想の赤ん坊」とは、自分が赤ん坊として育てられた時の不安や恐れや怒りなどの原始的な感覚体験から生まれた無意識の赤ん坊イメージである。「想像の赤ん坊」とは、妊娠後に胎児に対する種々の願望や想像から生じる赤ん坊イメージのことである。たとえば、母親は妊娠時に想像生活や白昼夢の中で胎児のイメージを膨らませて未来のプランを立てたり、実名で呼んだり、愛称で呼んだりする。こうして母親の潜在思考から発展する「想像の赤ん坊」は、世代間伝達における価値の担い手となる。そして母親は出産後、「現実の赤ん坊」に「幻想の赤ん坊」と「想像の赤ん坊」を投影しながら授乳し、世話をするのである。レボヴィシ,S.は母子同席の心理療法の中で、母子間の幻想的相互作用 (fantasmatic interaction) を取り扱った。幻想的相互作用とは、母親と乳児のもつ特性によって規定されながら、両者間の表象レベルで生じる相互のやりとりのことである。たとえば、赤ん坊が無邪気な愛情表現から母の顔に手を差しのぼそうとする行動の意味を母親が適切に読み取った場合、抱き上げてその気持ちをくみ取り、赤ん坊の安定した対象関係の発達を促すことができるのであるが、母親が自分自身の母親から虐待されていた経験を持つ場合は、そうした赤ん坊の行動を攻撃と受け取る場合があり、赤ん坊はそうすることによって不安になる母親の表象を内在化するようになる。このようなことから、レボヴィシ,S.やクラメール,B.G.は、母親の内的表象の投影が現実の母子相互作用にどのように影響しているかを吟味し、母親にその洞察を与えることで、母子の相互作用の歪みを解消することを考えたのである。

クラメール,B.G. (1989) は、母親が自分自身の親への無意識的葛藤を赤ん坊に投影し、赤ん坊は母親の投影した葛藤の体現者になり、そのシナリオを演じていくとした。そして、母親と赤ん坊はともに与えられた役割をドラマの俳優たちのように、シナリオ通りに忠実な形で演じるというのである。またクラメール,B.G.は、生まれる子どもを喪失と創造といった輪廻のサイクルの中に位置づけ、フロイト,S.が「子どもたちに名前を付けることで、子どもたちを幽霊にして

しまう」というのが常であったことを紹介している。そして、子どもが亡くなった祖父などの名高い祖先の誰かの名前を付けられることで、その先祖のイメージが「置き換え」というメカニズムによって親世代から子世代へと伝達され、その伝達されるものの中に遺伝子が書き込まれているとし、これを「心理的遺伝」と呼んでいる。また、生まれてくる子どもが祖先の身代わりである場合には、その子どもは親が失った人を再生させて、親の失意を緩和するといった期待を担っており、そうした「契約の下」で誕生するとしている。その一例として、オランダの画家であったヴィンセント・ヴァン・ゴッホが、兄のヴィンセントが夭折した一年後に自分が生まれ、兄と同じ名前を付けられた自分が兄の身代わりとして生きるという運命に苦しんだことを紹介している。

さらにクラメール, B.G. は、治療場面における母子相互作用をビデオで記録し、行動科学的な手法で解析するとともに、この解析によって親-乳幼児心理療法の中で引き起こされる母親の内的な心的表象の変化と、直接観察することのできる行動面での母子相互作用の変化との相関関係を解明する方法論を開発した。世代間伝達と投影同一化という心的表象の世界と、行動レベルの母子相互作用の世界とを統合的にとらえるこうした方法論は、現代精神分析に対して新しい認識の方法を提供することになったのである。

母性の影と世代間伝達

上記のような母子相互作用の研究に専心した欧米の臨床家の知見に基づいて、日本でも世代間伝達の問題が注目されるようになってきた。

乳幼児心理臨床の立場から母子の関係性の問題に取り組んでいる田中(1997)は、日本においては第二次世界大戦の敗戦を機に「母性の影」が生まれたとし、それが世代間伝達されることについて論じている。田中はまず、戦後の混乱期を生きた世代を「第一世代」と名付け、いかに効率よく生産性を上げて経済を復興させるかが課題であった第一世代は、目に見える成果を得て日常生活が豊かになっていくことを優先し、無意識的に自分の内面に目をそらし、心の中を分裂させることで現実に適応していったという。そして、内面に目をそらして生きた第一世代に育てられた「第二世代」は、親に内面を分かってもらえないのは仕方のないことだと、親との心理的葛藤を顕在化させず、心の中に残存させて生きてきたとしている。その第二世代は、第三世代を育てて行く上で自分たちが感じていたのと同様に、親に内面を分かってもらえないのは仕方のないことだとあきらめることを望んだのであるが、第三世代はあきらめることができず、心理的な問題を起こして苦悩しているという。そして、第二世代が第一世代との間で葬っていた心の欠損感は、いわば「未生の子」として第三世代に引き継がれたとしている。

乳幼児精神保健学の立場から母子の関係性の問題に取り組んでいる渡辺(2000)は、親子や夫婦で内面を語り合う習慣の乏しい日本では、多くの葛藤がまだ整理されないまま押し殺されており、この葛藤の世代間伝達が濃厚に認められるとしている。そして、生命あるものを慈しみ育てる姿勢を「母性原理」、目標に向かって計画的に事を運び、目に見える成果や効率のために手段を選ばぬ姿勢を「ビジネスの原理」とし、戦後急激に発達した工業化社会では「ビジネスの原理」が日々の子どもの生活に浸透し、「母性原理」を潰しつつあるとしている。

田中のいう親との間に「関係の希薄さ」あるいは「切れた(つまり分裂した)関係性」を体験

している第二世代は、渡辺のいう「ビジネスの原理」で生きてきた世代であり、関係性に対するある種の飢えを味わっている。親はその飢えを子どもとの関係の中で満たそうとするのであるが、一方子どもの側はそのようにされることで主体性を失い、侵襲されたという感情を体験することになる。このような親が自分の飢えを子どもとの関係の中で満たすことに関して、橋本（2000）は、子どもが母親の家族への適応を助ける世話役を果たす事例を取り上げ、実は母親自身が自分の親の世話役であった人であり、母親が心の奥にしまいこんでいた未解決の問題が子どもに引き継がれ、子どもの問題として現れるとしている。

親の関係性に対する飢えについて考える場合、親による子どもの虐待もそれに当てはまるであろう。そもそも日本語で「虐待」と訳されるabuseという言葉の本来の意味は、本道から逸脱して（ab）、使用する（use）ことであり、「ロングマン現代アメリカ英語辞典」によると、"the use of something in a way that it should not be used"である。つまり、親が自分の関係性に対する飢えを子どもの誤用あるいは乱用によって満たすことを意味している。深津（2001）は、育児困難を訴えたり、児童虐待をしたりする母親たちの精神療法は、母親の内面に無意識に世代間伝達されているその女性自身の母親との関係、その妊娠・出産・育児をめぐる相手の男性との関係の背景にある葛藤に目を向ける必要があるとしている。そしてその精神療法の中には、母親がその子どもとの関係に投影しているさまざまな欲動や情緒や葛藤を明確にし、再構成、再統合していく過程があるとし、その過程には治療者とクライアントとの間で、妊娠・出産し、子育てをしていく過程でのアンビヴァレンスが反復されることが多いとしている。児童虐待の世代間伝達に関する研究を展望した鶴飼（2000）は、親子治療が児童虐待の世代間のサイクルを打ち破る重要な手段であるとし、「親子双方が虐待－被虐待の関係から解放され、また他の人びとも新たな個人的な関係を作っていくことができるようになるために、親と子どもの両方がその経験を乗り越えられるよう、サポートがなされることが大切である」としている。

世代間伝達に関する臨床事例の提示

ここまでは、精神分析的観点からの主要な臨床的文献を展望してきた。これらを念頭に置きながら、筆者が体験した臨床事例の中で、世代間伝達という観点からの理解が有効であると考えられる典型事例を提示し、考察することとする（なお、提示する事例はプライバシー保護のために、テーマの本質に深く関わらない部分は変更していることをお断りしておくたい）。

クライアントは幼稚園の年長組に在籍しているA子（6歳）の母親である。主訴は、「子どもに対する接し方が最悪。大声で怒ったり、強く叩いたりなど、虐待しているのではないかと思う」とのことであった。筆者が「具体的に？」と尋ねると、「A子に対して継母のように常に怒り、あの子がほめて欲しそうにしても、ほめることができない。ほめる気になれない。汚い言葉で『あんたなんか、出て行きなさい！』と言って殴り、出かける時の用意も『何やっているの！早くやりなさい！』と言って蹴ったり殴ったりしてしまう。私がこうしてほしいと思っていることをちゃんとやってくれないのが腹が立つ。自分ではどうしてこんなに腹が立つのか分からないぐらい腹が立つ。」とのことであった。そしてそのように母親に怒られているA子は、母親の言う

ことに素直に従うこともあるが、最近では無視して聞き流したりするようになり、2歳前の弟のB男をよくいじめるようになったという。そして母親は、「B男もこれからどんどんA子みたいに無視するようになってくるのかもしれない」と不安そうな面持ちであった。

筆者が数回のセッションにわたって子どもたちへの不満や不安をひたすら聞き続けた後、<お母様のお母様はいかがでしたか？>と尋ねると、母親は次のようなことを一気に語り始めた。

「私がA子にそういう態度を取った後は、たまに母とのことが思い出されるんです。私の家族はC県に住んでいたのですが、私は1歳を過ぎた頃から小学校入学前ぐらいまで、D県にある母の実家や親戚の家に1ヶ月間預けられるということが年に何度もあったらしいのです。私は5人きょうだいの長女だったので、下の子が生まれるたびに長期間預けられていて、あまりかかわってもらえませんでした。父は一年のほとんどは仕事で出張に出ているので、私はよく母の家事を手伝ったり、下の子たちの面倒を見たりしていました。経済的にも苦しかったので、買って欲しいものをねだると怒られたり、しつこくねだると無視されて、スーパーから私だけ置いていかれそうになったりしたこともありました。母の実家の家族もお金に苦しかったのにきょうだいがたくさんで、長女だった母はよく『遊んでいる暇なんかはないよ!』と言われて、母の母によく手伝わされていたらしいです。私は小さい頃から、いつもその話を聞かされていました。私が高校時代、友達は毎日弁当を持ってきていましたが、私は母に一度も弁当を作ってもらえずに、自分で弁当を作って持って行ったり、売店でパンを買ったりして、友達と一緒に食べていたというのをよく覚えています。とにかく高校時代のことは、母にしてもらえなかったことばかりが記憶に残っています。私が短大の時に両親が離婚し、その後母は下の妹たちだけを連れてD県によく帰っていました。一番下の妹が就職したら、母はD県の実家に戻りました。ちょうどその頃、私が会社の階段を踏み外して両足を骨折したのですが、母は一度も見舞いに来てくれませんでした。最近では昔からのそういうことをいろいろと思い出して、イライラして子どもたちに当たってしまう。母とのことをクリアしないと子どもたちにますます八つ当たりして、悪影響が出てしまうと思う。今はあの子たちが傷つくのを分かっているにしてもしてしまうから。」

そして、次のセッションにおいては、「母親のことを思い出してイライラするようになったきっかけは、B男が生まれてA子がいろいろと悪さをして言うことを聞かなくなると、遊びに来ている母がまったくA子にかかわらなくなり、B男ばかりをかわいがるようになったこと。二人の孫に分け隔てなくかかわってやってほしい。私もA子を放っておいてB男の世話ばかりして、よく考えると母と同じようなことをしているので母のことは言えないが、母がA子にそうしたのがすごく嫌だった。見ていて、A子のがすごくかわいそうになる」と語った。そこで筆者が、<お母様も昔、下の子が生まれたら、かかわってもらえなかったということでしたが？>と言うと、「あ〜っ！だからそう思うのかもしれない。『お母さんは私のことを好きではないのだなあ』と思っていたような気がする。そういえば、きょうだい喧嘩をしていた時に、母に湯飲み茶碗を投げられて血が出たことがあったが、母は何も処置をしてくれなかった。いつも下の子たちばかりをかばうので、そういう時は確実に『私のことを好きではないんだ』と思っていた。私が母のことをなんとかしないと、A子は私とのいい思い出が作れないと思う」と語った。その後のセッションでは、「母に昔のことを話した」ことが話され、その後「母と大喧嘩をしている」ことがたびたび語られた。そして最終回には、「カウンセリングに来て話すことで、いろいろと昔の母

とのことが整理できて気持ちが落ち着いてきた。子どもたちに当たってしまうことも随分減ったし、手は出さなくてもよくなった。そうしたら、子どもも私を無視しなくなった」「母は相変わらずだが、まあ前から言いたかったことは言えし、今も我慢しないで言っている。こういう母とは、喧嘩しながらでも、やっぱり親だからなんとかつきあっていかないといけないのだと思う」とのことが語られた。

来談した母親が主訴を語る際、「(A子に対して) どうしてこんなに腹が立つのか分からないぐらい腹が立つ」とのことであったが、母親は自分のそのような内的状態が自分の力だけでは対処しきれないものであると感じ、また「虐待しているのかもしれない」と自分が幼児虐待者になることを恐れて、面接に訪れたものと推察される。当時母親は、A子に対して「蹴ったり殴ったり」しており、そうされているA子は弟のB男をいじめていたが、このことはA子が母親にされることを「攻撃者との同一化」(フロイト, A., 1966) によって、B男を葛藤の捌け口として利用している行動であると思われる。そしてこのことは、母親が自分の下のきょうだいにやりたかった行動であったかみせ、A子がB男に対して向けている行動によって、母親の心の内奥に眠っていた未解決の同胞間葛藤が活性化され始めたものと考えられる。

母親は、このようなA子とのかかわりの中で日々無意識が揺り動かされ、現在の内的状態が母親との関係に由来するのではないかと感じ始めた。そして数回のセッション後の回想では、下のきょうだいの出産のたびに1ヶ月間預けられていたこと、買って欲しいものをしてくねだると無視されていたこと、高校時代に一度も弁当を作ってもらえなかったことなどが語られた。またその中で、自分の母親もその上の母親に家事の補佐役を強いられていたことも語られ、そうされていた自分の母親が自分を補佐役にしていることが明らかになった。つまり、子どもを家事の補佐役として使い、子どもは我慢してその役割を遂行する、といったパターンが三世代にわたって伝達されていることが明らかになったのである。母親は、下のきょうだい達が偏愛され、あたかも自分が無視されているかのように感じていながらも、親との情緒的絆を保つために補佐役を演じていたものと思われる。また母親は初回に、子どもたちから無視されることへの不安を表明していたが、これは子どもたちとかかわりながら、投影同一化によって子どもの中に自分を世話せず無視していた自分自身の母親、つまりフライバーグ, S. のいう「育児部屋の幽霊」としての母親を見ていたものと思われる。さらに、「私がこうしてほしいと思っていることをちゃんとやってくれないのが腹が立つ」ということであったが、このことは、母親が無意識のうちに、自分の母親との間で満たされなかった関係性の飢えを満たす対象として、A子を用いようとしていたものと思われる。

そして母親は、「母とのことをクリアしないと子どもたちにますます八つ当たりして、悪影響が出てしまうと思う」と内省し、その次のセッションでは、B男出産後に自分の母親がB男を偏愛する態度が嫌だったことを語った。これは、母親がA子に過去の自分を投影し、母に怒りを感じていたものと思われるが、その一方で、自分も知らず知らずのうちに母親と同じことをやっていることに気づいた。そして、セラピストの問いかけをきっかけに、自分の母親が下のきょうだいを偏愛して、「私のことを好きではないんだ」と思っていたことを回想し、改めて自分と母親との関係の問題を検討しなければならないことを感じた。その後、母親との「大喧嘩」のエ

ピソードがたびたび話され、やがて最終回には、母親とのアンビヴァレントな関係を抱え持ちながら生きていくしかないという結論に至った。また、自分がとるA子への行動が自分の母親に対する葛藤に由来することを実感することで、母親はA子を自分の母親との葛藤を投影するための対象として用いる必要がなくなったものと思われる。

このように、自分の母親に適切に養育を受けなかったと感じていた母親が、セラピストとの間で抱えられる体験をし、セラピストからよい母親イメージを内在化していくことで、母親自身が否認していた自分の母親に対する葛藤について、感情を込めて内省することができるようになるのである。そしてそれによって母親は、自分自身の母親との関係と我が子との関係の双方を再構築できるようになり、葛藤を世代間伝達しないですむものと思われる。

おわりに

クライアントはセラピストとの出会いによって、抱えの環境としての心理的空間が与えられる。そしてクライアントは、そうした心理的空間の中で今まで否認してきた問題に向き合い、そこに意味を付与し、自分自身で新たな生き方を模索していく。そうした心理的空間におけるクライアントの内的変化の可能性について、セラピストにはクライアントを取り巻くさまざまな事象に秘められたコンステレーションとして読み取っていく姿勢が求められるであろう。しかし、こうしたコンステレーションの観点は、今回展望した精神分析的観点からの先行研究にはみられなかった。河合(1980)は、「家の中に起こる問題は先代から継承されたものであることが多い」として、世代間伝達の問題について示唆している。本論は精神分析的観点からの考察であったが、今後はコンステレーションなどのユング心理学的な観点も取り入れながら、臨床事例を多角的に考察することが課題である。

引用文献

- バルマリ,M. 岩崎 浩訳 1988 彫像の男—フロイトと父の隠された過ち— 哲学書房。(Balmaly,M. 1979 *L'homme aux Statues. Grasset et Fasquelle* : Paris.)
- ベルテルセン,D. 石光泰夫・石光輝子訳 1991 フロイト家の日常生活 平凡社。(Berthelsen,D. 1987 *Alltag bei Familie Freud. Die Erinnerungen der Paula Fichtl* . Hamburg : Hoffmann und Campe Verlag.)
- クラメール,B. 小此木啓吾・福崎裕子訳 1994 ママと赤ちゃんの心理療法 朝日出版社。(Cramer,B. 1989 *Profession Bebe* Calmann-Levy;Paris.)
- 共同訳聖書実行委員会 1987 聖書—新共同訳・旧訳聖書続編つき 日本聖書協会。(BIBLE with *Deuterocanonicals / Apocrypha*. The New Interconfessional Translation.)
- エリクソン,E.H. 西平 直訳 1991 フロイト—ユング往復書簡における〈大人であること〉という主題 「みすず」366, 61-75. みすず書房。(Erikson,E.H. 1980 Themes of adulthood in the Freud-Jung correspondence. Smelser,N.J. & Erikson,E.H. (ed.), *Themes of Work and Love in Adulthood*. Harvard University Press.)
- Fraiberg,S. 1975 Ghosts in the nursery : A psychoanalytic approach to the problems of impaired infant-mother relationships. *Journal of American academy of child psychiatry*, 14, 387-421.

辻河：世代間伝達に関する精神分析的考察

- フロイト,A. 1982 自我と防衛機制 アンナ・フロイト著作集2 岩崎学術出版社。(Freud,A. 1966 *The writing of Anna Freud Volume II, The ego and the mechanisms of defense.* International University Press,Inc.)
- 深津千賀子 2001 育児困難の母親にみられる"章提希"の葛藤 小此木啓吾・北山 修編 阿蘭世コンプレックス 創元社 Pp.250-267.
- 橋本やよい 2000 母親の心理療法 日本評論社.
- 河合隼雄 1980 家族関係を考える 講談社現代新書.
- クリュル,M. 水野節夫・山下公子訳 1987 フロイトとその父 思索社。(Krüll,M. 1979 *Freud und sein vater* Beck'sche Verlagsbuchhandlung ; München)
- 古澤平作 1954 罪悪意識の二種—阿蘭世コンプレックス 精神分析研究, 1(2) (「小此木啓吾・北山 修編 阿蘭世コンプレックス」の中に所収) .
- レボヴィン,S. 小此木啓吾訳 1991 幻想的な相互作用と世代間伝達 精神分析研究, 34(5), 285-291. (Lebovici,S. 1988 *Fantasmatic interaction and intergenerational transmission. Infant mental health journal, 9(1), 10-19.*)
- 小此木啓吾 1992 フロイト・S. に関する伝記的研究の動向 精神分析研究, 36(3), 218-228.
- 小此木啓吾 1988 阿蘭世コンプレックス—どうとらえるか 精神分析研究, 32(2), 103-116.
- 小此木啓吾 2002 フロイト思想のキーワード 講談社現代新書.
- 定方 晟 1984 阿蘭世のすくい 人文書院.
- ソボクレス 藤沢令夫訳 1967 オイディプス王 岩波文庫.
- 田中千穂子 1997 乳幼児心理臨床の世界 山王出版.
- 鵜飼奈津子 2000 児童虐待の世代間伝達に関する一考察 心理臨床学研究,18(4),402-411.
- 渡辺久子 2000 母子臨床と世代間伝達 金剛出版.
- ウィニコット,D.W. 牛島定信訳 1977 情緒発達 of 精神分析理論 岩崎学術出版社。(Winnicott,D.W. 1965 *The maturational processes and the facilitating environment.* London : The Hogarth Press.)
- ウィニコット,D.W. 橋本雅雄訳 1979 遊ぶことと現実 岩崎学術出版社。(Winnicott,D.W. 1971 *Playing and reality.* London : Associated Book Publishers.)

(臨床実践指導学講座 博士後期課程2回生)

(受稿2007年9月7日、改稿2007年11月30日、受理2007年12月12日)

Consideration of Intergenerational Transmission from the Psychoanalytic Perspectives

TSUJIKAWA Masato

Mothers who possess difficulties or concerns regarding ambiguous anxieties, caused by the annoyance of childrearing, cannot control themselves. It seems that the mothers' own and their family's unsolved problems lurk in such anxieties. Their problems forced their children to bear the burden of intergenerational transmission, and the children expressed it with their symptoms and behaviors. The purpose of this paper is to abstract from and review the most academically outstanding research papers on intergenerational transmission from the psychoanalytic perspectives and to clarify the method for future work. In this paper, the definition of intergenerational transmission is that a parent's unsolved problems between his or her own parent and him or her are transmitted in a way that he or she is annoyed by the problems and he or she has some difficulties to rear his or her children. First, the paper is reviewed by all the four themes related to intergenerational transmission. Second, based on the review above, the clinical case of the mother, annoyed by her six-year-old daughter, is presented and consideration from the viewpoint of intergenerational transmission is attempted. Finally, how future work should be conducted is indicated and that the clinical cases the author experienced should also be considered from the Jungian perspectives.